

秋田市松木台II遺跡の須恵器

船木 義勝¹⁾ 泉 広宣²⁾

1 はじめに

松木台II遺跡は秋田市上新城中字松木台、五十丁に位置する(図1)。周辺には県史跡である末沢窯跡群、鳥形須恵器を出土した右馬之丞窯跡、秋田城跡の瓦と一緒に焼成している古城廻窯跡、大沢I窯跡、谷地II遺跡などがあり、これら窯跡群を包括して新城窯跡群と総称されている(表1)。新城窯跡群の出土資料の報告となると皆無であるから、新城窯跡群の規模、操業期間、変遷、工人集団に係る問題についての見通しが得られないまま現在に至っている。筆者は秋田県立博物館において、古代史関係の展示を計画することとなったのを機会に松木台II遺跡の資料整理を始めることにしたのが本報告のきっかけである。

松木台II遺跡出土の資料は、遺跡である土地を所有する永田慶之助氏が保管していたものであり、同氏のご好意により昭和57年2月22日付で秋田県立博物館が所有することとなったものである。本資料の内容は縄紋土器(晩期)・土師器・須恵器などであるが、これら遺物の出土地点、出土状態など詳細は不明である。

今後鋭意整理作業を進めてゆく予定であるが、本稿では実測を終えた須恵器について速報として報告するものである。したがって近い将来全資料の整理作業と実測が完了すればあらためて報告を用意することとしたい。

2 須恵器

松木台II遺跡出土の須恵器には、杯・高台杯・蓋・壺・長頸壺・鉢・片口鉢・甕等の器種がある。うち杯・高台杯・蓋・長頸壺の一部について実測をおこなった。

(1) 杯 (図3・4)

底面の切り離しは回転ヘラ切りであり、体部下端の削り調整など再調整はみられない。火襻の痕跡をもつが、無いもの(3)もある。色調は褐灰、灰白、灰黄、浅黄橙色が多い。胎土は粗く砂粒が目立つ。全体に雑な作り方である。体部下端から上半にかけてくびれ、外反気味に立上がりながら、口縁部はまっすぐに伸びるか内反気味になるなどの特徴をもつ。(17・25)は体部下端から口縁部までまっすぐ伸びるので他の杯と異なる。

25個体の杯を法量基準に基づき計測を行った(図2)。計測した25個体の法量は、口径13.3～14.5cm(平均13.81cm)、底径は7.5～9.3cm(平均8.25cm)、器高2.75～4.14cm(平均3.39cm)であり、底径指数0.552～0.643(平均0.597)、高径指数19.9～28.8(平均24.53)、外傾度21.9～39.8度(平均34.30度)である。図3・4は口径の大きい順に並べてみたものである。法量からみると、口径と底径で大きな差はないが、器高では(25)が大きく、外傾度では(17・25)が小さい。相対的にみれば(17・25)の形態が他と異なるようにみえるが、同一製作時における個体

表1 新城窯跡群の遺跡

秋田市遺跡番号	遺跡名	窯跡基数	所在地	備考
85	末沢窯跡群	2	秋田市下新城字末沢	
87	谷地Ⅱ遺跡	2	秋田市下新城字谷地、末沢	
88	大沢窯跡Ⅰ	4	秋田市下新城中字大沢61	
89	大沢窯跡Ⅱ	1	秋田市下新城中字大沢61	
90	小林窯跡	2	秋田市下新城五十丁字小林	
116	右馬之丞窯跡	1	秋田市下新城字右馬之丞	
118	松木台Ⅱ遺跡		秋田市下新城中字松木台、五十丁字小林	窯跡？

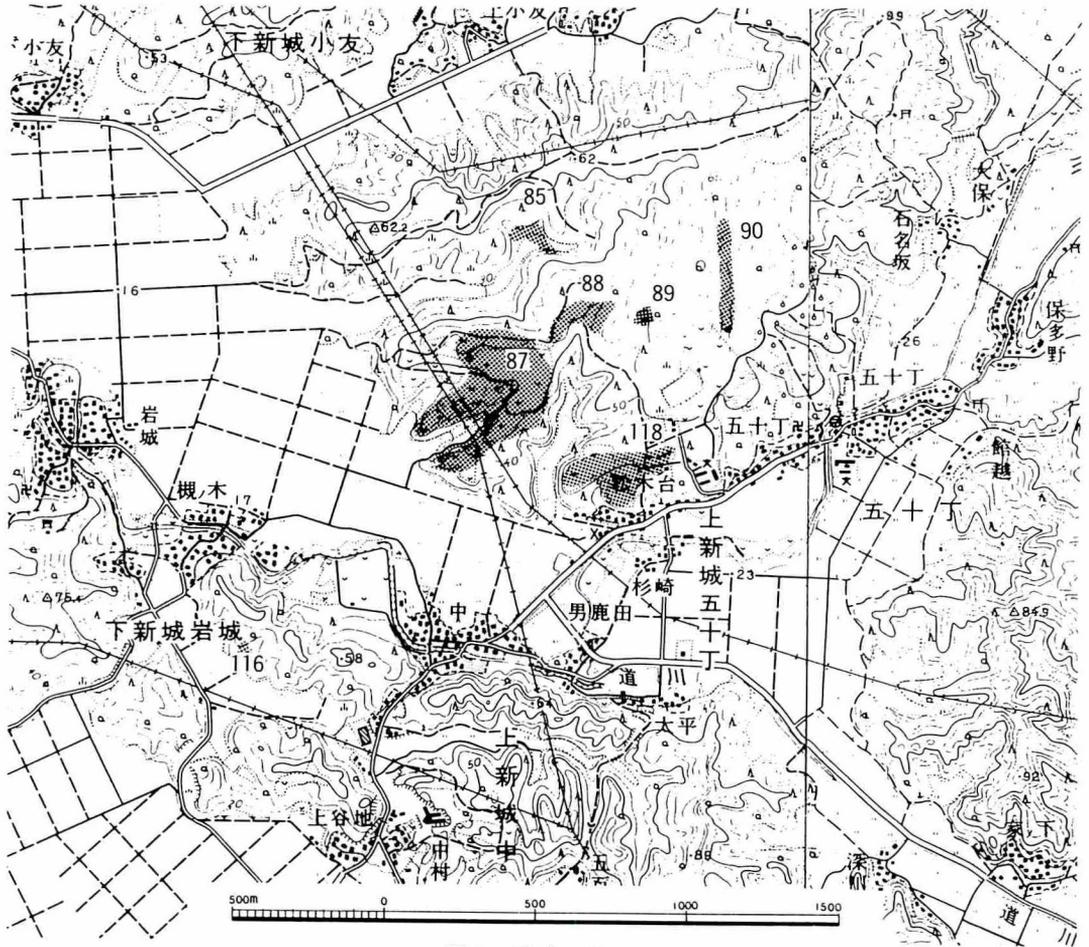


図1 遺跡の位置

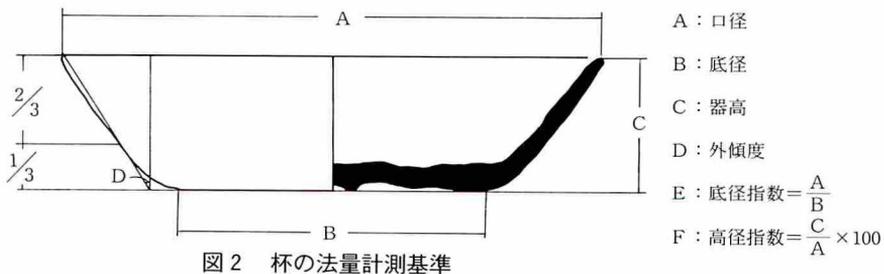


図2 杯の法量計測基準

秋田市松木第II遺跡の須恵器

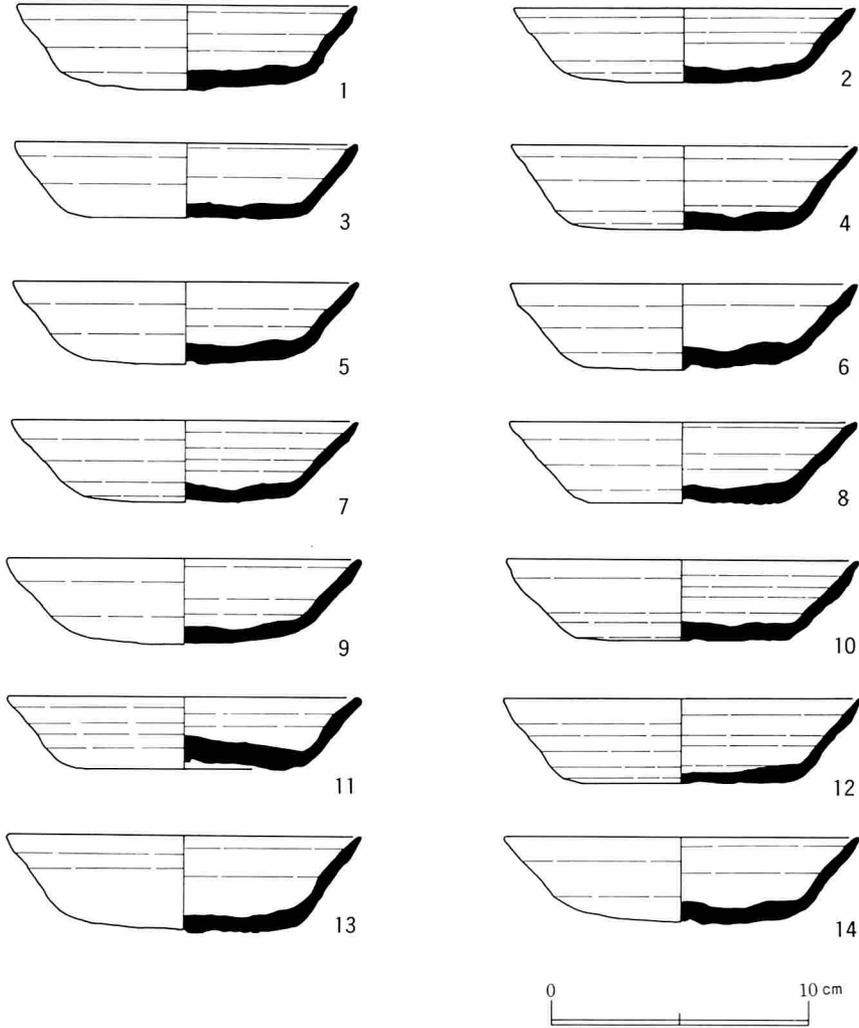


図3 杯(1)

番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径指数	高径指数	外傾度	切り離し	筥 記号	収蔵 番号
1	須恵器杯	13.3	(7.5)	3.4	0.564	25.6	30.8°	回転ヘラ切り	○	2362
2	須恵器杯	13.3	8.2	2.98	0.617	22.4	35.7°	回転ヘラ切り	○	2367
3	須恵器杯	13.3	(8.0)	3.0	0.602	22.6	32.7°	回転ヘラ切り	○	2379
4	須恵器杯	13.4	(8.4)	3.4	0.627	25.4	33.6°	回転ヘラ切り	○	2355
5	須恵器杯	13.4	(7.4)	3.28	0.552	24.5	35.5°	回転ヘラ切り	○	2356
6	須恵器杯	13.4	7.6	3.45	0.567	25.7	35.4°	回転ヘラ切り	○	2368
7	須恵器杯	13.5	7.9	3.29	0.585	24.4	38.4°	回転ヘラ切り	○	2359
8	須恵器杯	13.5	(8.0)	3.25	0.593	24.1	38.5°	回転ヘラ切り	×	2377
9	須恵器杯	13.7	(8.35)	3.4	0.609	24.8	35.2°	回転ヘラ切り	○	2357
10	須恵器杯	13.7	(8.0)	3.25	0.584	23.7	36.0°	回転ヘラ切り	○	2365
11	須恵器杯	13.7	(8.1)	2.85	0.591	20.8	34.6°	回転ヘラ切り	○	2375
12	須恵器杯	13.8	(8.5)	3.4	0.616	24.6	33.5°	回転ヘラ切り	○	2363
13	須恵器杯	13.8	(8.1)	3.82	0.587	27.7	32.8°	回転ヘラ切り	○	2366
14	須恵器杯	13.8	8.0	3.45	0.58	25.0	37.0°	回転ヘラ切り	○	2370

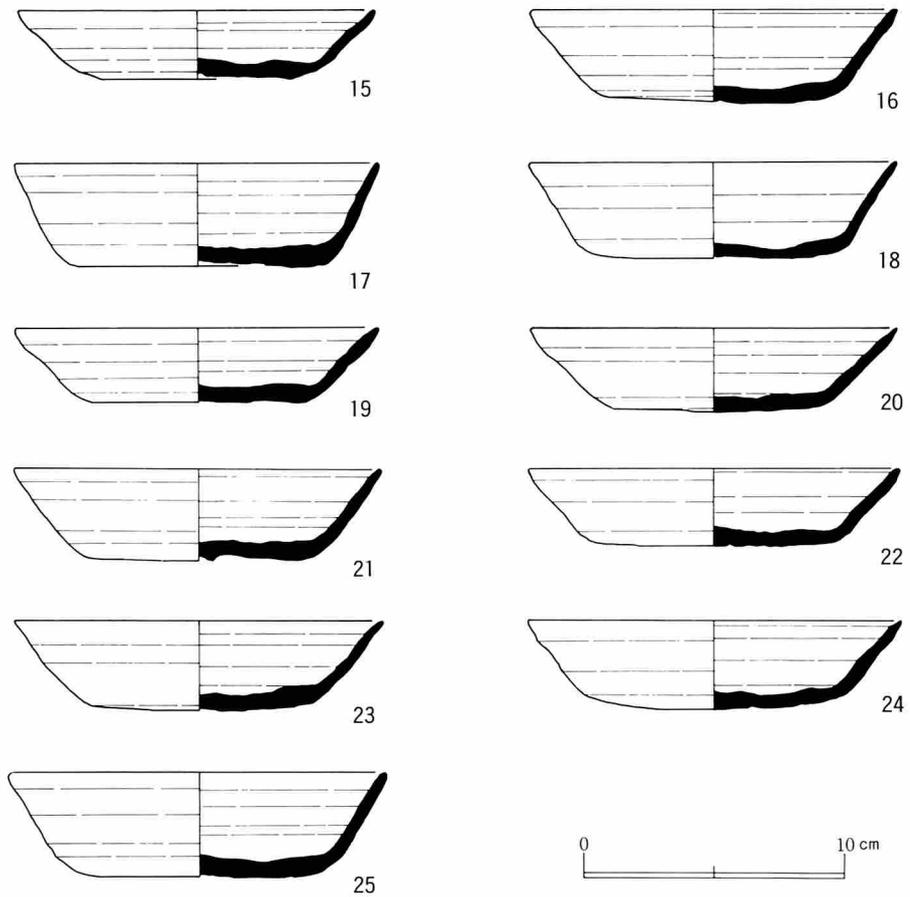


図4 杯(2)

番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	底径指数	高径指数	外傾度	切り離し	筥 記号	収蔵 番号
15	須恵器杯	13.8	7.7	2.75	0.558	19.9	38.8°	回転ヘラ切り	○	2376
16	須恵器杯	14.0	(8.6)	3.7	0.614	26.4	33.3°	回転ヘラ切り	○	2371
17	須恵器杯	14.0	(9.0)	4.05	0.643	28.9	21.9°	回転ヘラ切り	×	2372
18	須恵器杯	14.1	(8.6)	3.8	0.61	27.0	29.3°	回転ヘラ切り	×	2358
19	須恵器杯	14.1	(8.3)	2.92	0.589	20.7	39.0°	回転ヘラ切り	○	2369
20	須恵器杯	14.1	(7.95)	3.32	0.564	23.5	39.8°	回転ヘラ切り	○	2373
21	須恵器杯	14.2	8.3	3.6	0.585	25.4	32.6°	回転ヘラ切り	○	2374
22	須恵器杯	14.2	(8.6)	3.11	0.606	21.9	36.5°	回転ヘラ切り	○	2378
23	須恵器杯	14.3	(8.6)	3.57	0.601	25.0	37.0°	回転ヘラ切り	○	2361
24	須恵器杯	14.3	9.2	3.5	0.643	24.5	33.5°	回転ヘラ切り	○	2364
25	須恵器杯	14.5	9.3	4.14	0.641	28.6	26.0°	回転ヘラ切り	×	2360

差なのか時間差なのかわからない。25個体のなかに後述するヘラ記号をもつものが21個体ある。

(2) 高台杯 (図5)

底面の切り離しは回転ヘラ切りである。火掣をもつものはない。色調は灰色である。胎土は良質の粘土である。高台杯は口径、身の

深さなどによっていくつかのタイプがある。高台の接合位置が底面の外側に接する位置に付されるものと若干内側に入るもの(32)とがある。8個体のうち、ヘラ記号をもつものが2個体ある。ヘラ記号の有無による成形、調整などの相違はみられない。

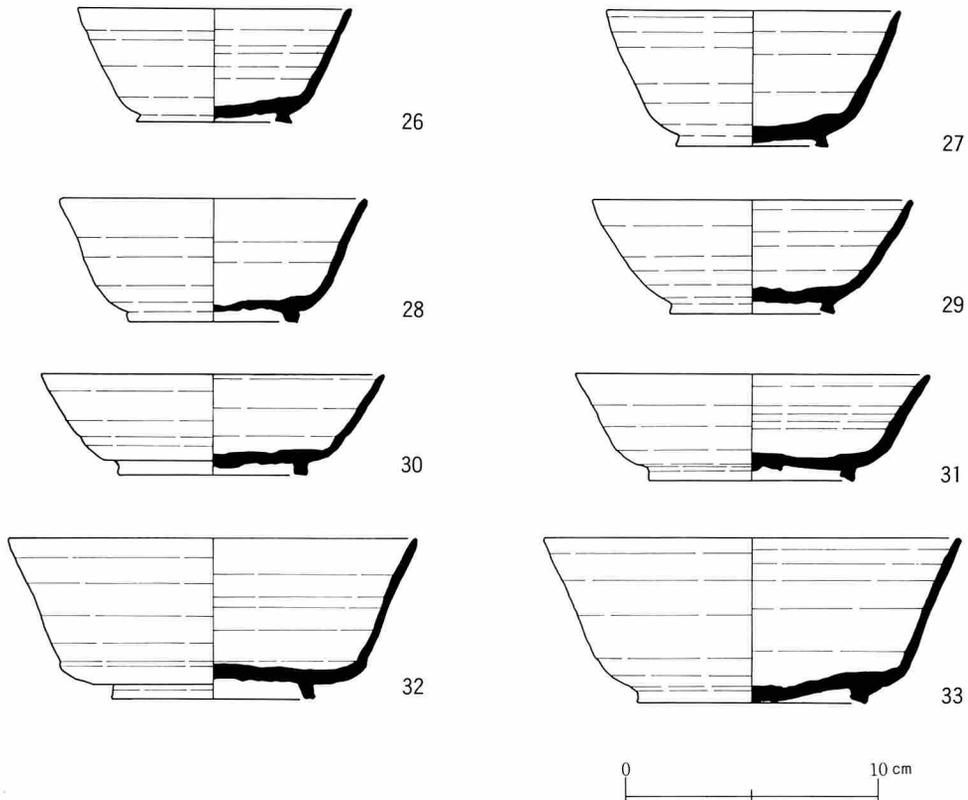


図5 高台杯

番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	切り離し	篋 記号	収蔵 番号
26	高台杯	10.8	6.2	4.5	回転ヘラ切り	×	2382
27	高台杯	11.6	6.0	5.38	回転ヘラ切り	×	2383
28	高台杯	12.2	6.6	4.92	回転ヘラ切り	×	2384
29	高台杯	12.5	6.44	4.6	回転ヘラ切り	×	2381
30	高台杯	13.6	7.4	4.1	回転ヘラ切り	○	2385
31	高台杯	13.9	8.1	4.3	回転ヘラ切り	○	2380
32	高台杯	16.2	8.4	6.4	回転ヘラ切り	×	2388
33	高台杯	16.4	9.0	6.6	回転ヘラ切り	×	2387

(3) 蓋 (図6)

ロクロからの切り離しは不明であるがおそらく回転ヘラ切りであろう。火襷をもつものはない。色調は灰、灰白色である。つまみはボタン状ないし擬宝珠形のものである。天井部は丸いものというよりも平坦なものが多い。(41)は壺用の蓋であろう。胎土は砂粒を含む。(43・41)は比較的ていねいな作りであるが、他は雑な作り方ある。口径によって、13cm代・14.6～15.6cm・16cm代と3グループに分けられる。

(4) 長頸壺 (図7)

(44・45)は首(口縁部)を肩ののせて接合しているが、肩部の構成が2段か3段なのかどうかは不明である。(43)は3条の沈線があり、胎土に3～5%の黒い斑点がみえる。

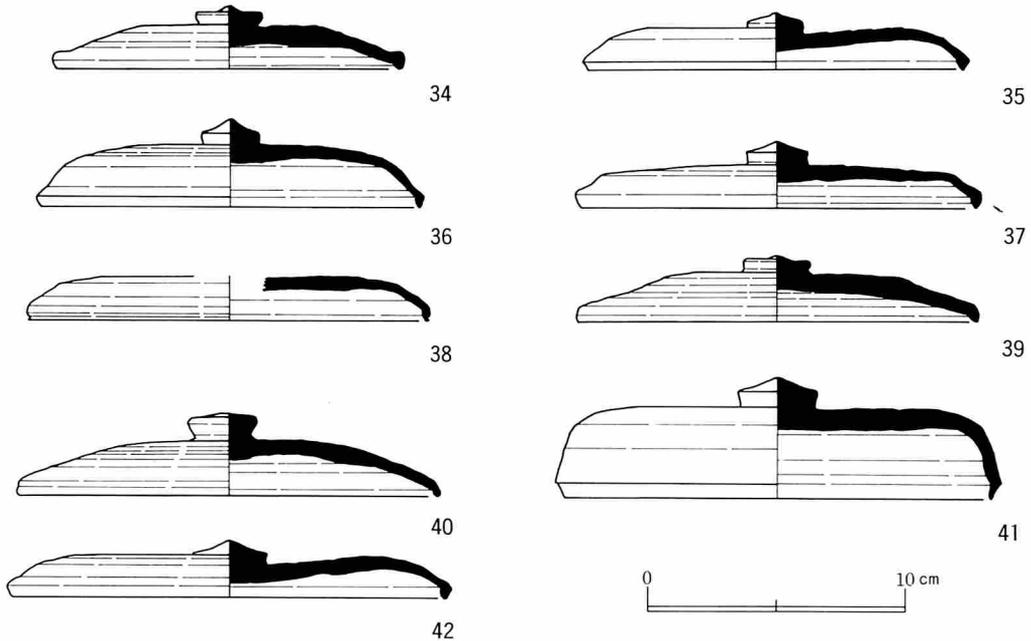


図6 蓋

番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	切り離し	収蔵番号
34	蓋	13.4		2.6	不明	2392
35	蓋	14.6		2.3	不明	2394
36	蓋	15.0		3.52	不明	2397
37	蓋	15.4		2.65	不明	2393
38	蓋	15.6		—	不明	2396
39	蓋	15.6		2.68	不明	2398
40	蓋	16.4		3.32	不明	2391
41	蓋	16.6		4.85	不明	2390
42	蓋	17.0		2.3	不明	2395

3 窯印をもつ杯と高台杯

(図8～11、写真1)

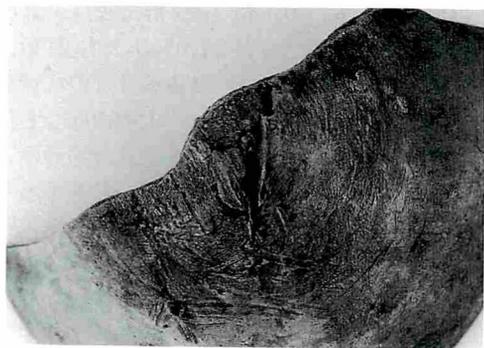


写真1 ヘラ記号を持つ杯

杯（無台杯）の底面を観察している過程で、回転ヘラ切りをした後、須恵器を倒置し、底面のほぼ中央にヘラで引っ掻くような痕跡（以下、「筥記号」という）をもつ土器群があることを認めた（写真1）。ヘラ記号とした陰刻線の長さや深さに規格性をもたないが、目印としての役目を果たし得たのでないかという程度のものである。いずれにせよ、一つの窯印といえる痕跡であり、色調や火禿、杯体部の調整技法に共通する特徴をもつものが多いことなどもわかった。ヘラ記号をもつ杯（無台杯）は21個体、このほか未実測の破片のなかにも数点認められる。

筥記号をもつ杯21個体について法量計測基準に基づく計測数値をまとめてみた（図8～11）。法量は、口径13.3～14.3cm（平均13.77cm）、底径7.5～9.2cm（平均8.15cm）、器高2.75～3.82cm（平均3.30cm）であり、底

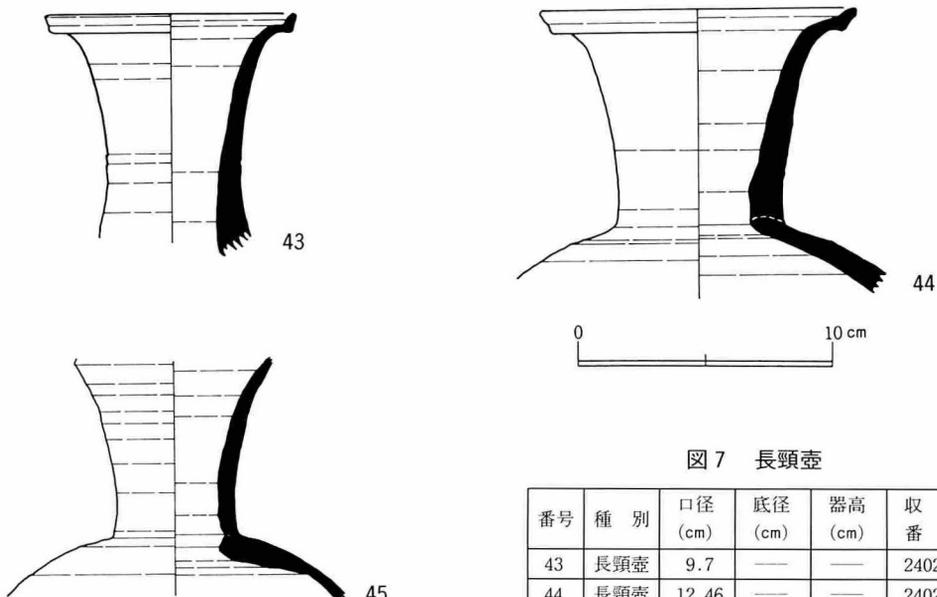


図7 長頸壺

番号	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	収蔵 番号
43	長頸壺	9.7	—	—	2402②
44	長頸壺	12.46	—	—	2402①
45	長頸壺	—	—	—	2402③

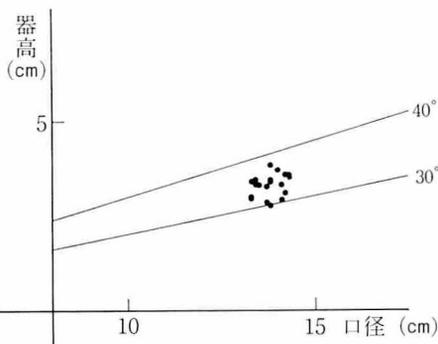


図8 口径・器高・外傾度の相関

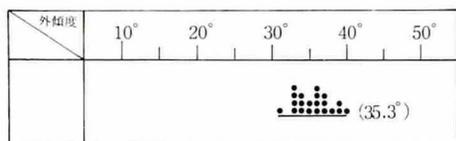


図9 外傾度 ()内は平均値

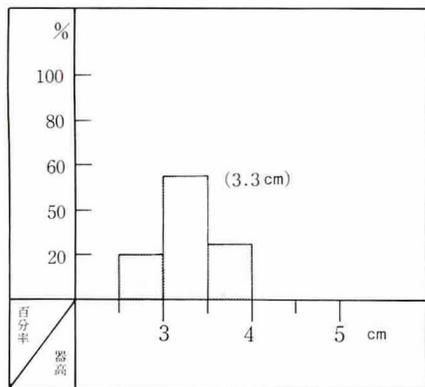


図10 器高 ()内は平均値

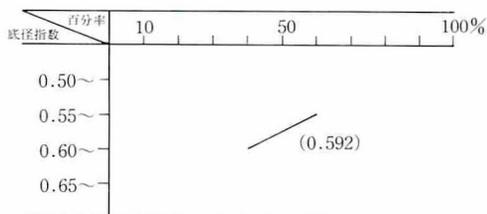


図11 底径指数 ()内は平均値

径指数0.552~0.643 (平均0.592)、高径指数19.9~27.7 (平均24.0)、外傾度30.8~39.8度 (平均35.3度)である。この法量数値の範囲はおおよそ一器形の規格とみなし得るのであろう。このようにヘラ記号の共通性、形態的な特徴の一致、法量などを考慮すると、窯印をもつ杯の製作は同時期、同一工人の製品とみなして差し支えないと判断したい。

ヘラ記号をもたないが調整技法、形態的な特徴の一致などから同一土器群と扱ってよい杯(8・18)もある。これ以外の杯(17・25)は調整技法、形態、法量などが異なり、時期を異にする一群と位置付けておきたい。

高台杯にもヘラ記号をもつものが2点ある。ヘラ記号の付け方などに差異はないので杯と同時期、同一工人の製品とみなしておきたい。このヘラ記号をもつ高台杯の高台(付け高台)部分の付け方に特徴があり、ヘラ記号と同様な高台をもつ一群(26~31・33)と、異なる(32)とに分けることができる。

これまでの観察結果から、杯と高台杯はヘラ記号をもつ土器を含む一群とこれらと調整技法、形態、法量を異にする一群があることがわかった。ここで前者をXグループ、後者をYグループの土器群としておきたい。Yグループとした杯と高台杯が共伴するかどうか検証できないが、ここでは同一グループとみなしておくことにする。

4 杯・高台杯の編年的位置

須恵器生産の実態に迫るためには須恵器の編年研究の確立が前提となる。筆者はこれまで古代出羽国の生産窯出土須恵器のもつ法量規格性に注目して年代を推定する作業を蓄積してきたので検討してみる。

既述したXグループ土器群の編年的位置は、遺跡が秋田平野に位置するのであるから秋田平野とその周辺の窯跡群とのかかわりの中で捉えなければならない。これらのなかで現在

報告されているのは秋田市手形山窯跡群⁽³⁾、南秋田郡若美町海老沢窯跡群⁴だけであり、Xグループの杯は手形山窯跡群・海老沢窯跡群の杯と形態、法量を異にすると判断できる。したがってXグループ土器群は県内窯跡資料との相対的な位置付けの中で編年的位置を確認するしかない。

Xグループとした杯の法量指数と調整技法は、八世紀段階の伝統を残しながらも既に製品の小型化という法量縮小傾向、製作技法の簡略化が進んでいるようにみえる。横手盆地の須恵器窯編年を参照すると、法量における底径指数は郷土館窯土器段階に近く、外傾度は成沢窯土器段階に近い数値とわかつた⁽⁵⁾。これらの所見から松木台Ⅱ遺跡のXグループ土器群の相対年代はおおよそ九世紀前半の半ばとなろう。

Yグループの杯は共伴関係が不明であり何とも言えないが、Xグループの杯より年代的に古い要素をもっているから八世紀代と思考するが、詳細については今後の課題としておきたい。

5 おわりに

松木台Ⅱ遺跡出土とされる須恵器のうち、Xグループとしたヘラ記号を含む土器群の編年的な位置について見通しを述べた。これを秋田平野における須恵器の編年（奈良・平安時代）として、現在報告されている資料で組み立てれば、手形山窯跡群→松木台Ⅱ遺跡Xグループ土器群→海老沢窯跡群という変遷となろう。

九世紀前半の半ばとした松木台Ⅱ遺跡のXグループ土器群の年代観は所詮相対的な年代にすぎない。幸いなことに秋田城跡の第54次調査⁽⁶⁾において高さ5mにおよぶ古代の堆積層から木簡、年紀をもつ漆紙文書とともに大量の須恵器・土師器という土器群が発見されているのであるから、ヘラ記号という特徴的な

須恵器が秋田城跡から出土しているかどうか確認するとともに、記述した年代が妥当なのか検証することが大事なことである。

本収蔵資料の中に焼き台としてよいものが2点認められる。仮に焼き台とXグループの土器群が同一遺構の出土であれば、本遺跡の性格は生活の場（集落遺跡）というよりも窯跡（生産遺跡）の可能性が高いと思われるが、併せて今後の課題としたい。

註

- 1 上法香苗「秋田市上新城の古代窯址群について」『秋田考古学』第7号 1957.9
- 2 a 岩見誠夫・船木義勝「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」『秋大史学』第32号 1985.11
b 岩見誠夫・船木義勝・能登谷宣康「山形県の須恵器および須恵器窯の編年」『山形考古』第4巻第2号 1988.4
- 3 秋田県教育委員会『手形山窯跡』1975.2
- 4 a 秋田県教育委員会『海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第32集 1950.3
b 若美町教育委員会『西海老沢遺跡発掘調査報告書』1987.3
- 5 註2 a 文献
- 6 秋田市教育委員会『秋田城跡—平成2年度発掘調査概報—』1991.3